

第4章

運航（船内活動）

1 運航日程・航路図

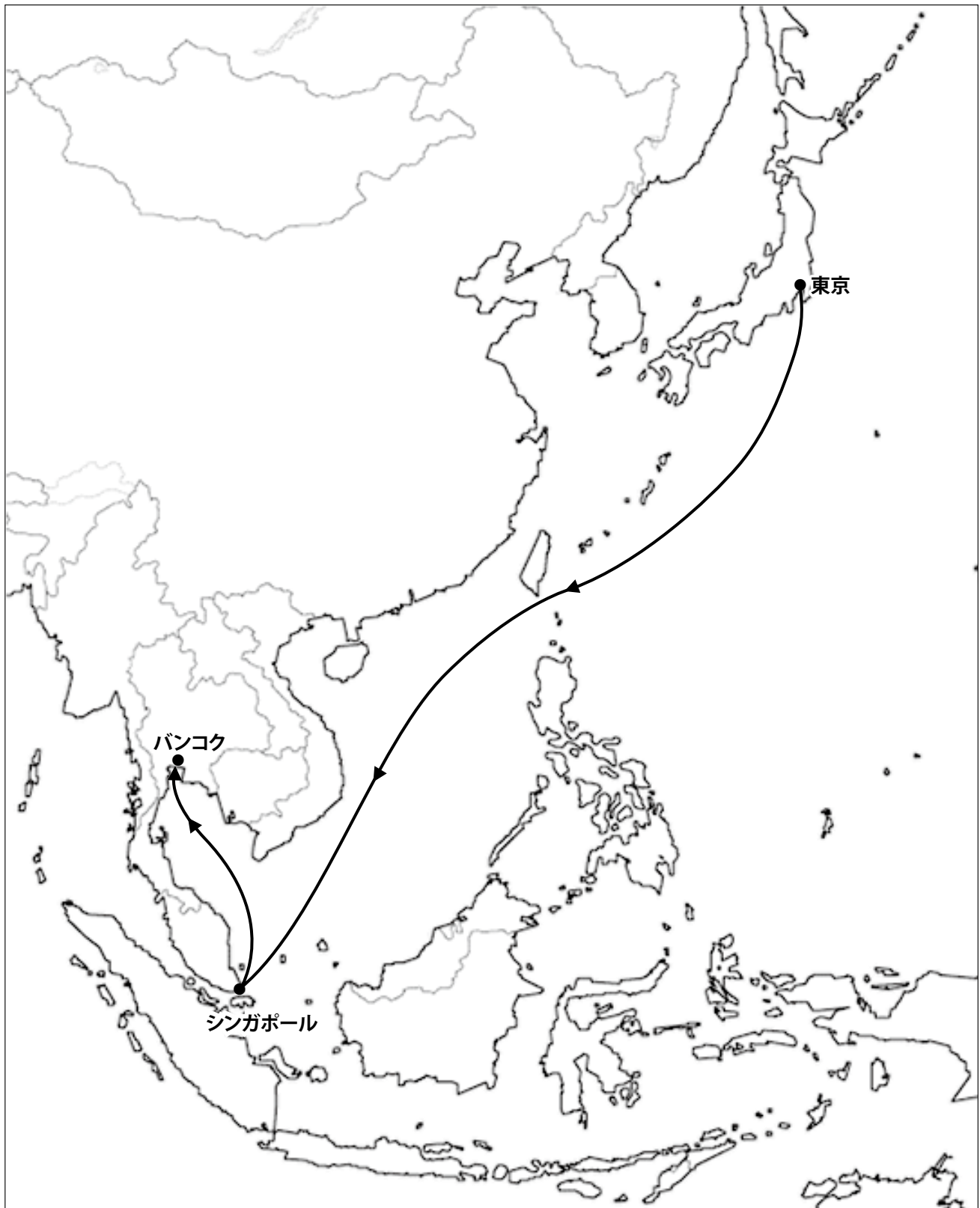
(1) 運航日程

	入港	出港
東京 (日本)	—	1月26日
シンガポール	2月4日	2月8日
バンコク (タイ)	2月11日	—

(注)

- ASEANのナショナル・リーダー (NL) 及び参加青年 (PY) は1月15日に来日し、1月25日に乗船。
- ファシリテーターは1月19日に来日し、翌20日にNL及びPYと合流、日本国内活動の後、1月25日に乗船。
- 各国事後活動組織代表者は2月7日に、シンガポールから乗船。
- ASEAN政府代表者は2月14日に、バンコク (タイ) に集合。
- タイにおいてPYは2月13日に下船 (NLは2月14日に下船)、寄港地活動と解散式、解散交歓会後、2月17日に飛行機にて帰国。

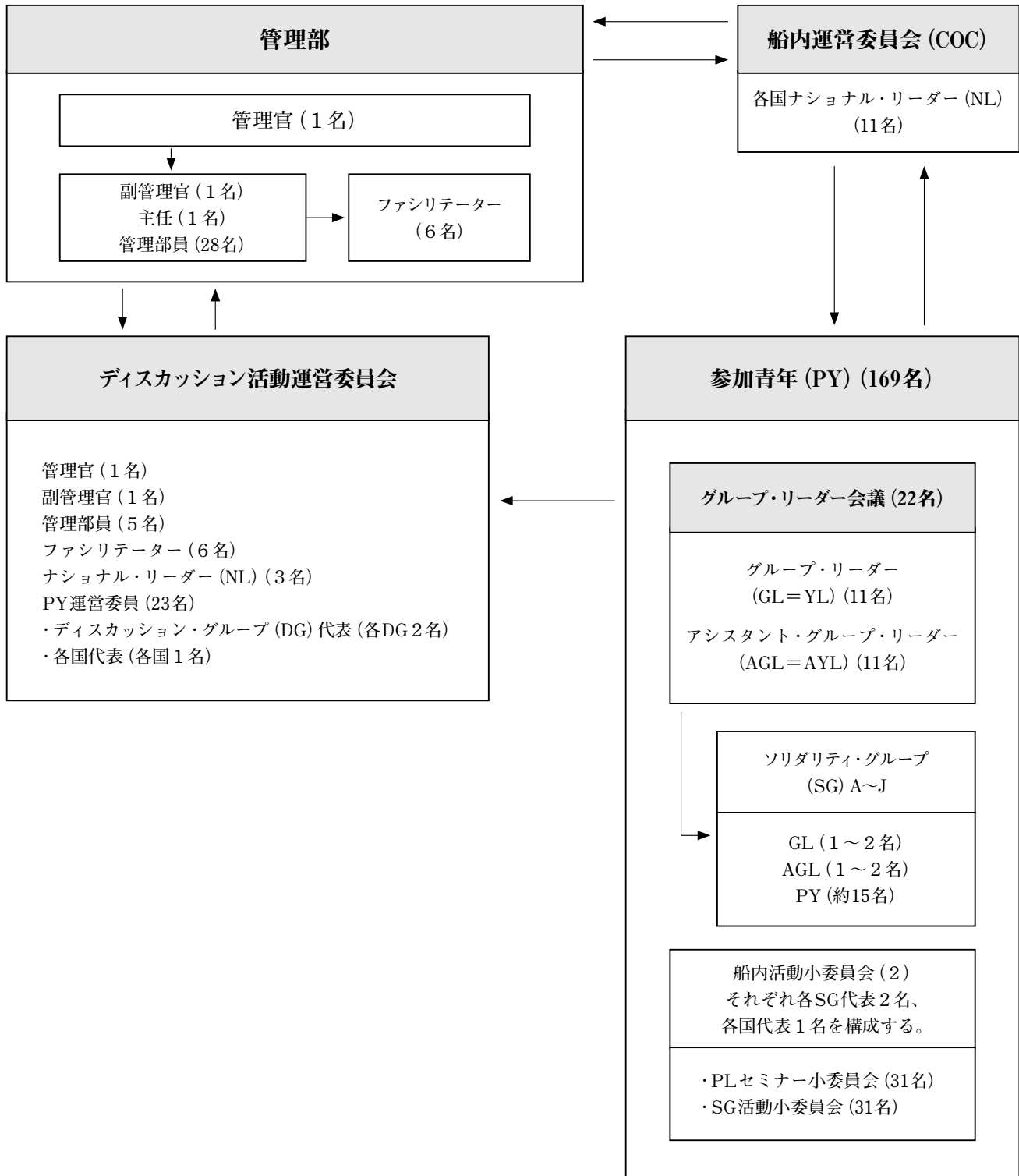
(2) 航路図



2 船内組織

(1) 船内組織図

第49回「東南アジア青年の船」事業の船内組織は、次のとおりである。



(2) 船内運営委員会(COC)

COCは、NL11名をもって構成し、船内における生活基準、船内活動等の基本的事項について、協議して決定する。また、グループ・リーダー会議、ディスカッション

活動運営委員会、各船内活動小委員会及びPYに対し、指導及び助言を行う。なお、管理官は、COCに対し必要に応じて指導及び助言を行うことができる。

【NL 名簿】

国名	氏名	担当会議・小委員会
日本		ディスカッション活動運営委員会
シンガポール		PLセミナー小委員会
タイ		PLセミナー小委員会
ブルネイ		ディスカッション活動運営委員会
カンボジア		グループ・リーダー会議
インドネシア		ディスカッション活動運営委員会
ラオス		PLセミナー小委員会
マレーシア		SG活動小委員会
フィリピン		グループ・リーダー会議
東ティモール		グループ・リーダー会議
ベトナム		SG活動小委員会

(3) ソリダリティ・グループ(SG)

船内及び訪問国における活動の基礎単位として、各国PYほぼ同数の男女から成る約17名ずつのグループを組織した。これをソリダリティ・グループ(SG)と呼び、SG-AからSG-Jまで計10グループに編成した。

各SGには、それぞれグループ・リーダー(GL)及びアシスタント・グループ・リーダー(AGL)を置き、彼らがグループを統率した。GL及びAGLには、各国のユース・リーダー(YL)及びアシスタント・ユース・リーダー(AYL)を充て、かつ、同国のYLとAYLが同じSGに割り当てられないよう配慮して編成した。

また、各種活動・情報伝達を円滑に行うために、船内では、なるべく同じSGのメンバーが同室となるよう考慮した。

(4) グループ・リーダー会議(GLミーティング)

グループ・リーダー会議は、それぞれ11名のGL(YL)及びAGL(AYL)により構成し、NL3名(カンボジア、フィリピン、東ティモール)を顧問とし、必要に応じて船内活動等について協議し、COC等に対して意見を述べた。また、COC又は管理部からのPYに対する連絡事項の伝達やSG間の調整を行った。

PYから提案された様々な自主活動の企画については、必要に応じてグループ・リーダー会議を通して検討・調整し、実施した。

【YL・AYL 名簿】

国名	YL氏名	AYL氏名
日本		
シンガポール		
タイ		
ブルネイ		
カンボジア		
インドネシア		
ラオス		
マレーシア		
フィリピン		
東ティモール		
ベトナム		

(5) ディスカッション活動運営委員会

ディスカッション活動運営委員会は、ディスカッション活動の適切な運営を図るため、管理官、副管理官、管理部員5名、ファシリテーター6名、NL3名(日本、ブルネ

イ、インドネシア)、PY運営委員23名をもって構成した。

ファシリテーターは、管理官の命を受けて、本事業に係る事務のうちディスカッションに関するものを処理した。

【ディスカッション活動運営委員会名簿】 * 国名に下線付きは国代表PY

	ディスカッション・グループ	氏名	国名
管理官	—		—
副管理官	—		—
管理部員	—		—
ファシリテーター	質の高い教育		フィリピン
	経済成長と持続可能で責任ある観光		フィリピン
	地球環境と気候変動		フィリピン
	防災と復興		日本
	社会福祉と包摂的な社会の実現		シンガポール
	デジタル社会と人工知能(AI)		ネパール
NL			日本
			ブルネイ
			インドネシア

	ディスカッション・グループ	氏名	国名
PY運営委員	質の高い教育		<u>日本</u>
			シンガポール
			フィリピン
			<u>東ティモール</u>
	経済成長と持続可能で責任ある観光		シンガポール
			<u>ブルネイ</u>
			マレーシア
			<u>マレーシア</u>
	地球環境と気候変動		タイ
			フィリピン
	防災と復興		日本
			<u>タイ</u>
			カンボジア
			<u>ラオス</u>
			<u>ベトナム</u>
	社会福祉と包摂的な社会の実現		<u>シンガポール</u>
			<u>カンボジア</u>
			インドネシア
			マレーシア
			<u>フィリピン</u>
	デジタル社会と人工知能 (AI)		シンガポール
			<u>インドネシア</u>
			ベトナム

(6) 船内活動小委員会

船内活動小委員会はPYで構成し、NLを顧問とし、各船内活動の実施の細目について協議して決定する機関である。

PLセミナー及びSG活動の各小委員会は、各SG代表

2名、各国代表1名で構成し、それぞれ計31名で構成した。PLセミナー小委員会の顧問をシンガポール、タイ、ラオスのNL3名が、SG活動小委員会の顧問をマレーシア、ベトナムのNL2名が、それぞれ務めた。

【PLセミナー活動小委員会名簿】 *国名に下線付きは国代表PY

SG	氏名	国名
A		日本
		<u>タイ</u>
		タイ
		<u>フィリピン</u>
B		日本
		タイ
C		日本
		タイ
		<u>ベトナム</u>
D		<u>カンボジア</u>
		ラオス
		ベトナム
E		日本
		<u>シンガポール</u>
		カンボジア
F		タイ
		フィリピン
		<u>東ティモール</u>
G		日本
		日本
		<u>ラオス</u>
H		<u>ブルネイ</u>
		ラオス
		<u>マレーシア</u>
		フィリピン
I		カンボジア
		<u>インドネシア</u>
		フィリピン
J		<u>日本</u>
		日本
		ラオス

【SG活動小委員会名簿】 *国名に下線付きは国代表PY

SG	氏名	国名
A		ブルネイ
		カンボジア
		<u>東ティモール</u>
B		日本
		<u>ブルネイ</u>
		ベトナム
C		<u>ラオス</u>
		ラオス
		マレーシア
D		インドネシア
		マレーシア
		<u>フィリピン</u>
E		<u>タイ</u>
		シンガポール
		ラオス
		<u>ベトナム</u>
F		シンガポール
		<u>カンボジア</u>
		カンボジア
G		<u>シンガポール</u>
		ラオス
		<u>マレーシア</u>
		ベトナム
H		日本
		インドネシア
I		シンガポール
		タイ
		<u>インドネシア</u>
J		<u>日本</u>
		カンボジア
		ラオス

3 船内運営委員会 (COC)

COCにおける協議事項は、次のとおり、生活規律・船内活動・訪問国活動など、広範多岐にわたった。第1回及び第2回COCはNL会議の際にオンラインで、第3回以降は基本的に各訪問国活動最終日の出航後に開催した。

第1回及び第2回COCの際に協議・決定した事項のうち、PYに周知・徹底すべきものについては「ハンドブック」にまとめ、全参加者に配付した。

また、船内におけるPYへの連絡事項については、モーニング・アセンブリー、国別ミーティングや船内所定の掲示板を利用した。

【COC協議事項】

第1回 (10月22日、オンライン)

「第2章 6. ナショナル・リーダー会議」を参照。

第2回 (12月10日、オンライン)

「第2章 6. ナショナル・リーダー会議」を参照。

第3回 (1月26日、船内COCルーム)

日本国内活動の振り返り

第4回 (2月8日、船内COCルーム)

シンガポールにおける訪問国活動の振り返り

第5回 (2月15日、宿泊ホテル会議室)

タイにおける訪問国活動の振り返り

4 船内活動

(1) 船内生活

1. 船内生活時間

航海中の船内生活時間は、訪問国における活動を除き、次のとおりである。

時間	活動内容
7:00	起床 (モーニングコール)
7:30-8:00	モーニング・エクササイズ
8:00-9:00	朝食
9:15-9:45	モーニング・アセンブリー
10:00-12:45	活動
12:45-14:15	昼食
14:15-17:00	活動
17:00-18:00	自由
18:00-19:30	夕食
19:30-20:30	活動
20:30-23:00	自由
23:00	消灯 (ナイトコール) / ナイトパトロール

2. 船内生活のあらまし

- モーニングコール、ナイトコール

モーニングコールは、毎朝7時に、PYが当番制 (SG持

ち回り) で、船内放送を使用して起床の呼びかけや音楽を流す等、趣向を凝らした内容であった。また、モーニングコールと同様に、毎晩23時にはPYが当番制 (SG持ち回り) でナイトコールを実施した。

- モーニング・エクササイズ

毎朝7時30分から8時まで、ドルフィンホール又はスポーツデッキで、PYが当番制 (SG持ち回り) で実施し、内容は音楽を使った体操やダンス等多彩であった。モーニング・エクササイズへの参加は任意とした。

- モーニング・アセンブリー

毎朝9時15分から9時45分まで、ドルフィンホールにおいて、SGごとに整列し点呼及び健康確認を行い、その後、当番のNLが当日のスケジュール確認や連絡事項の伝達を行った。

- 活動

午前、午後及び夜の三つの時間帯に区分して実施した (詳細は後述)。午前及び午後の活動としては、ディスカッション活動、PLセミナー及びSG活動等を、夜の活動としてはナショナル・プレゼンテーション (NP) や自主活動を、それぞれ実施した。

- ナイトパトロール

ナイトコール終了後、NLが当番制で、船内各所を巡回、異常の有無を確認し、船内の安全確保に努めた。

(2) 令和7年度「東南アジア青年の船」事業(第49回) 船内活動日程

月	日	10:00～11:15	11:30～12:45	14:15 ～15:30	15:45～17:00	19:30～20:30		
1月	25日(日)					乗船 船側オリエンテーション	荷物移動	
	26日(月)	避難訓練 (10:00-10:30)	出国手続き (10:30-12:00)	船内公開 (13:15-14:30)	出航式 (15:00-15:35)	国別ミーティング (17:00-18:00)	COCミーティング 自主活動	
	27日(火)	管理部 オリエンテーション	GLミーティング／ディスカッショ ン活動運営委員会／船内活動 小委員会 (SG活動・PLセミナ ー) ／プレス担当者連絡会		PLセミナー活動紹介		ブルネイ紹介	
	28日(水)	管理官講話		船長講話		写真撮影		カンボジア紹介
	29日(木)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅡ)			GLミーティング／ディスカッション活動運営委員会／ 船内活動小委員会 (SG活動・PLセミナー) ／ プレス担当者連絡会		インドネシア紹介	
	30日(金)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅢ)			PLセミナーⅠ	PLセミナーⅡ	ラオス紹介	
	31日(土)	フリーデイ (半日)			SG活動Ⅰ		マレーシア紹介	
2月	1日(日)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅣ)			PLセミナーⅢ	PLセミナーⅣ	フィリピン紹介	
	2日(月)	ディスカッション活動 (グループ・ディスカッションⅤ)			SG活動Ⅱ		東ティモール紹介	
	3日(火)	ディスカッション活動 (まとめ・自己評価)			PLセミナーⅤ	PLセミナーⅥ	シンガポール紹介	
	4日(水)	シンガポール訪問国活動						
	5日(木)							
	6日(金)							
	7日(土)							
	8日(日)					国別ミーティング	COCミーティング 自主活動	
	9日(月)	フリーデイ (半日)			事後活動セッションⅠ (全体会)		ベトナム紹介	
	10日(火)	事後活動セッションⅡ (国別・各国の事後活動紹介・ プロジェクト案議論)			下船手続き説明	国別ミーティング	タイ紹介	
	11日(水)	タイ訪問国活動						
	12日(木)							
	13日(金)							
	14日(土)							
	15日(日)				各国政府代表者連絡会議		COCミーティング	
					参加青年			
					国別ミーティング	ディスカッション成果発表／ サマリー・フォーラム準備		
16日(月)	ディスカッション成果発表			サマリー・フォーラム	解散式	帰国説明	解散交歓会	
17日(火)	日本参加青年：事業振り返り、帰国							
	ASEAN各国青年等・事後活動組織代表者・各国政府代表者・ファシリテーター：帰国							

(3) ディスカッション活動・事後活動セッション

ディスカッション活動は、異なる背景を持つ各国PYが自由に意見交換を行うことによって相互理解を深めるとともに、集団における合意形成能力やプレゼンテーション能力の向上を図ること等を目的として実施した。

詳しくは、第7章「ディスカッション活動」を参照。

事後活動セッションは、ディスカッション活動の成果を活かし、事後活動への積極的な参加の促進、事後活動組織のネットワーク強化等を目的として実施した。

詳しくは、第8章「事後活動セッション」を参照。

(4) ピア・ラーニング・セミナー(PLセミナー)

PLセミナーは、PYがこれまで勉強してきたこと又は経験してきたこと等について比較的少人数の仲間と共有又は議論する活動として、次のことを目的として実施した。

[参加者]

- PYがこれまで勉強してきたこと又は経験してきたこと等を仲間と共有することによりお互いのバックグラウンドをより深く知ること。
- ワークショップ、講義やディスカッションの効果的な実施方法を主催者の運営方法から学ぶこと。
- 評価及び価値のあるフィードバックができるようになること。

[主催者]

- 自らの考えや経験等を仲間に伝えることによりプレゼンテーション能力を高めること。
- セミナーの企画・立案から実施までの一連のプロセスを経験することによりプロジェクトの遂行能力を高めること。

また、主催にあたって、以下の四つの項目に該当する活動であることを必要条件とする。

- 1) 社会的な価値を有する内容であること
- 2) 国際的な意義を有する内容であること
- 3) 文化理解を深め、広い視野を養う内容であること
- 4) 諸外国との国際交流及び協力を促進する内容であること

PLセミナーの運営は、担当顧問であるNL3名(シンガポール、タイ、ラオス)の指導の下、PLセミナー小委員会が次の方針に沿って行った。

- セミナーのテーマは「社会をより良くするための取組」を基本とし、知的な学びがある内容とすること。
- セミナーの内容は、PYがこれまでに取り組んできた、また現在取り組んでいる研究や活動から得られた経験や知見のほか、PYの自国の活動報告で各国と共有する価値があるようなものでも良い。
- 主催者はセミナーのテーマ内容の専門家である必要はない。体験及び知識を共有するに当たり、学術的な

内容に限らず日常生活に即した内容でも良い。その場合、主催者はセミナー内容を深めるに当たり、テーマ内容に関連する調査をし、研究すること。

- 各セミナーは、主催者が参加者と協力して運営する。
- セミナーの手法として、ワークショップ方式、講義方式、ディスカッション方式、その他、セミナーのテーマに適した効果的な方法で実施する。
- 主催者は、参加者の好奇心を刺激し、セミナーに参加する経験がより良いものとなるように、相互に交流や対話でき、クリエイティブなセミナーになるよう心掛けて計画すること。
- 原則として活動時間1コマ(75分)又は連続した2コマで一つのセミナーが完結するようにすること。
- 活動時間には、(1) 導入、(2) 活動、(3) 参加者からのフィードバック、(4) 片付けを含めること。
- 前号に掲げる「(3) 参加者からのフィードバック」では、主催者が参加者からセミナーの運営や内容、その他についてフィードバックを受けること。主に、主催者が何を継続又は改善が必要かという観点からフィードバックを受ける。主催者は、参加者からのフィードバック用の時間を最低でも15分設けること。

セミナーの開催に際し、まず、1月27日に、主催するPYが全PYに対して、各PLセミナーの活動内容を紹介した。PYは、PLセミナー6セッションの全てに、主催者又は参加者として、それぞれ一つずつのPLセミナーに参加した。

開催されたPLセミナーは次のとおりである。

PLセミナー一覧

* B: ブルネイ、C: カンボジア、I: インドネシア、J: 日本、L: ラオス、Ma: マレーシア、P: フィリピン、S: シンガポール、T: タイ、Tim: 東ティモール、V: ベトナム

<ブルネイ>

- 1) 題名: かけがえのない繋がり: 抱擁 (Embrace) の力
主催者: B06, B08

目標

- 家族との絆を深める。
- 私たちは皆ただの人間であり、多くの間違いを犯す、完璧ではない存在であると伝える。
- 自分の感情を表現することは大切であり、そうすることで少なくとも心の重荷を少し軽くできると気づいてもらう。
- 常に私たちのそばにいてくれる存在、すなわち「家族」のことを忘れないようにしてもらう。

主催者の学び

- プログラムの進行や流れを、より体系的に組み立てられるようになった。

- ・人々の多様な態度や考え方について深く学べた。
- ・新しいことに挑戦する意義に気づき、視野が広がった。
- ・より深い共感力を持てるよう、自分自身を成長させられた。

2) 題名：手で話そう(手話入門)

主催者：B05, B01

目標

- ・各国における、聴覚障害者コミュニティに対する理解と啓発を促す。
- ・青年たちに手話を教える。
- ・青年たちの中に、手話を学びたいという意欲を育む。

主催者の学び

主催者として、非常に多くの人が手話を学ぶことに興味を持っていると知ることができた。ブルネイでは、手話を熱心に学ぼうとする人の大半は女性である。しかし、このSSEAYPのプログラムを通じて、「人文学的な事柄(福祉や人へのケアなど)に関心を持つのは女性だけである」という固定観念が打ち破られた。

さらに、時間管理の重要性や、人々がより楽しく簡単に手話を学べるよう、双方向性のあるゲームを考案するスキルも身につけることができた。

3) 題名：仲間から平和の構築者へ：暴力的過激主義の防止に向けた青年の力の結集

主催者：B11

目標

- ・参加者に「暴力的過激主義の予防と対策(P/CVE: Preventing and Countering Violent Extremism)」の概念を紹介する。
- ・システム思考の「因果ループ図(Causal Loop Diagram)」を用いて、過激化や暴力的過激主義の直接的及び間接的な原因を探索する実践的な機会を提供する。
- ・多様な知見を結集し、東南アジア及び日本地域全体において、暴力的過激主義を予防・対策するための「青年主導の取り組み」の可能性を探索する。

主催者の学び

ソーシャルメディアが共通の要因であり、特に強い正義感や思いやりを持つ青年たちから共感を得て、プロパガンダを増幅させるために過激派グループに悪用・利用されている手段であるという事実を確認できた。さらに、過激派の言説に対抗するための解決策として、ソーシャルメディア上のバイアスに対するAIの認識精度の向上や、教育及び啓発のさらなる強化などが挙げられた。

進行の面では、このセミナーを単独で開催するこ

とは非常に困難であった。そのため、今後のピア・ラーニング・セミナーにおいては、特にすべてのロジスティクス(機材や備品の準備等)を迅速に行えるよう、少なくとも2名以上の企画者で運営することを提案する。

4) 題名：ブルネイ流ブレスワーク(呼吸法)

主催者：B04, B10

目標

呼吸の機能(肺活量)を最大限に高め、リラックスする。

主催者の学び

参加者に対するホスピタリティや、彼らの関心を引きつけ、主体的に巻き込むスキルについて学んだ。

<カンボジア>

1) 題名：国境を越える筆(アート交流)

主催者：C16, C11, C14, C12, C07, C03

目標

「国境を越える筆(Bristles Beyond Borders)」の目的は、意義深いアートを通じた交流によって、参加青年間の異文化理解、持続可能で責任ある観光、そして永続的な友情を促進することにある。これは、私たちのディスカッション・グループのテーマである「持続可能で責任ある観光」とも連動している。

ポラロイド写真と組み合わせた手描きのポストカードを制作・交換することを通じて、参加青年たちは持続可能性、責任、及び文化保存について深く考えながら、自国の観光地を通してそれぞれの国の個性やアイデンティティを表現するよう促された。

主催者の学び

- ・違いを乗り越え、異文化間の対話を促進する「普遍的な言語」としてのアートの価値を学んだ。
- ・ASEANと日本における「持続可能で責任ある観光」を、単なる国家の課題としてではなく、自分自身の個人的な責任として理解できた。
- ・創造性がいかに相互理解を豊かにするかを認識し、ASEANと日本の多様性の素晴らしさを実感した。
- ・表面的な交流ではなく、有意義で形に残る交流を通じて、より深い対人関係を構築できた。

2) 題名：なぜZ世代にとって「セラピー」だけが解決策ではないのか

主催者：C04, C01, C02, C05, C09

目標

- ・専門的な心理療法やカウンセリングに過度に頼ることなく、ストレスを軽減するための解決策について議論する。
- ・Z世代がすべての世代の中で最もメンタルヘルス

に対する意識が高いにもかかわらず、精神疾患が増加している原因を理解する。

- ・親が子どもを育てる際のガイド(指針)となるような、最適な「ユース・モデル(若者のロールモデルやあり方)」を見極める。

主催者の学び

- ・各国の参加青年が、それぞれ全く異なる状況や経験に直面していると知った。
- ・メンタルヘルス不調の増加に関する、新たな視点や考え方を発見できた。
- ・メンタルヘルスに対する向き合い方や対処法は、人によって本当に様々であると学んだ。

3) 題名:ブレインフード入門(脳を育てる食事)

主催者: C15, C08, C10, C06, C13

目標

本セミナーの主な目的は、参加青年たちに日々の食習慣が健康に与える影響を理解してもらい、全体的な心身の健康を向上させるための、シンプルで現実的な変化へと導くことである。具体的には、「砂糖の摂取量に関するセッション」と「より栄養価の高い食品を選ぶためのヒント」の共有に重点を置いた。

主催者の学び

企画者として、基礎的な栄養素について、参加者全員が楽しめるような魅力的なプレゼンテーションを行う方法を学んだ。「日々の選択が自身のウェルビーイングを形作る」ということである。

また、参加した参加青年たちからも、彼ら自身の食事計画に関する多くの有益な意見やアイデアを得ることができた。さらに、企画を担当したすべての参加青年が、事前の計画・準備から事後の片付けに至るまで、素晴らしいピア・ラーニング・セミナーを作り上げるために協力し合うチームワークの大切さも学んだ。

<インドネシア>

1) 題名:絆を育むスパイス:スパイスで一つに

主催者: I11, I03, I05, I07, I10, I12, I16

目標

「絆を育むスパイス (Spice that Shapes Connection)」は、スパイスが持つ共通の歴史と文化的な重要性を通じてASEANの青年たちを結びつけ、貿易、外交、そして美食・食文化を通じて、スパイスがいかに国境を越えて人々を繋いできたかを示すことを目的としている。また、世界的な「スパイス・ルート(香辛料の道)」においてインドネシア及びASEANが果たしてきた中心的な役割についての国際的な認知度を高め、それが世界史、人々の移住、そして文化交流に与えた影響を浮き彫りにする。

単なる文化鑑賞にとどまらず、本セミナーは、アイデンティティや儀式、料理、そして社会的な繋がりを形成する「生きた遺産(Living heritage)」としてスパイスを探究するよう参加者に促す。さらに、対話型のインタラクティブな活動や協働セッションを通じて、チームワーク、コミュニケーション、調整力、そして互いを尊重する対話といった、不可欠なリーダーシップ・スキルを強化する。

最終的に本セミナーは、より繋がりが深く持続可能な未来に向けた、結束、学び、そして協働のリーダーシップの象徴として、スパイスを単なる「食材」以上のものとして捉えるよう青年たちに働きかけることを目指した。

主催者の学び

ASEANのいくつかの国や日本におけるスパイスの使用法、日常生活での取り入れ方、そして単なる食べ物としてだけでなく、人々の繋がりと関係性を形成するものとして社会がスパイスをどう捉えているかについて、多くの有意義な議論を交わすことができた。

また、この機会にインドネシアのガストロノミーやウェルネス製品について共有し、参加青年たちに実際に試して体験してもらえたことを非常に嬉しく思う。本セミナーに関して多くの肯定的なフィードバックをいただき、私たちが用意したガストロノミーのブースは、数ある中で最も人気のあるブースとなった。

2) 題名:プレッシャーを手放し、自分の「フロー」を見つける

主催者: I04, I06, I05, I01, I15

目標

- ・メンタルヘルスに対する意識を高める。
- ・自分自身を愛することを始めるきっかけを作る。
- ・参加者に対して、瞑想は誰でも簡単に実践できるものであると伝える。
- ・プログラム中のストレスを解放するための、実践的な「入門編」や「短い気分転換」に関する知識を提供する。
- ・地域の伝統的な知恵や文化の価値を認識し、尊重する。

主催者の学び

- ・プログラムの進行や構成を、より体系的に組み立てられるようになった。
- ・他者に対して深い共感を示せるようになった。
- ・イベントの企画・運営を通じて、実践的なリーダーシップを学べた。
- ・多くの人々の心、とりわけ参加者たちと深く繋がることのできた。

- ・プロフェッショナルとしての振る舞いや姿勢を身につけられた。

3) 題名：戦略的団結：協働による問題解決のためのリーダーシップ・ゲーム

主催者：I09, I01, I07, I14, I11, I13, I08, I15

目標

- ・チームとの絆を深める。
- ・チーム内で協力し合う。
- ・互いに信頼関係を築く。
- ・参加青年のリーダーシップ・スキルを高める。

主催者の学び

- ・プログラムの進行や流れを、より体系的に組み立てられるようになった。
- ・イベント開始前の導入部分の工夫や改善ができた。
- ・参加青年たちと、より双方向の交流や関わりが持てた。
- ・互いを尊重し、協力し合う姿勢を学べた。

4) 題名：多様性の教典

主催者：I08, I01, I02, I03, I04, I05, I06, I09, I10, I14

目標

本セミナーの目的は、インドネシアの伝統的な文字(ジャワ文字、バリ文字、ロンタラ文字)の豊かさを紹介し、それを入り口として、文化的なアイデンティティ、しなやかな強さ、そして共有の遺産に関する「日本とASEANのより広範な対話」を生み出すことである。

インドネシアのみに焦点を当てるのではなく、東南アジアや日本のより広い文脈の中にインドネシアの文字を位置づけ、歴史的な繋がりや、文化の喪失という共通の課題、そして地域全体で並行して行われている保存への取り組みを浮き彫りにする。

文脈を踏まえたプレゼンテーション、オープンな議論、実際の手書き体験、そして文化的なアート表現を通じて、日本とASEANにおける文字体系が単なる「言語ツール」としてだけでなく、記憶、価値観、アイデンティティの「継承者」としてどのように機能しているのかについて、参加者に深く考察するよう促した。

本セミナーは、包摂的な学び合いを促進し、異文化理解を深め、文化保存が日本とASEANの「共同の責任」であることを強調することを目指した。最終的には、参加者が自身の遺産と再び繋がり、地域の結束という共通のビジョンを強化することで、文化に根差し、価値観を重んじるリーダーシップの育成を支援することを目的とした。

主催者の学び

主催者として、日本とASEANの文脈において、文

化遺産がいかに強いつながりと対話を生み出す「強力な媒体」となり得るかについて、より深い理解を得ることができた。

本セミナーを進行したことで、学術的な知識を、多様な文化的背景を持つ参加者の心に響くような「包摂的で対話型の学習体験」へと変換する能力が鍛えられた。また、構造と創造性のバランスをとり、仲間との交流、内省、そして自己表現のための余白を残したアクティビティを設計することの重要性も学んだ。

参加者の熱狂的な参加姿勢とポジティブなフィードバックは、「文化保存は、協働してアプローチすることで、共感、相互尊重、そして遺産に対する共有の当事者意識を育むことができる」という私たちの信念をさらに強固なものにしてくれた。また、この経験は私たちのリーダーシップ、調整力、ファシリテーションのスキルを向上させ、地域の伝統とグローバルな視点とを結びつける意義深い対話を生み出す「文化の架け橋 (Cultural bridges)」としての私たちの役割を確信させてくれた。

<日本>

- 1) 題名：指標(インデックス)はいかにしてジェンダー不平等を隠蔽するのか

主催者：J12, J03, J05

目標

以下の点について考え、参加青年たちから多様な社会について学ぶ機会を創出する。

- ・単一の指標では、問題のあらゆる側面を説明することはできない。
- ・世界基準を盲目的に追及するのではなく、自国の文化や歴史を考慮すべきである。

主催者の学び

私たちは今回初めてセミナーを企画・運営したが、多様な背景を持つ参加青年たちに対して、議題や前提となる基礎知識を簡潔に説明することの難しさを実感した。

セミナーの中で、ある参加青年が「もし自国の文化や伝統を尊重するのであれば、世界経済フォーラム(WEF)が理想として掲げるような『ジェンダー平等』を必ずしも達成する必要はないのではないか」と発言した。私自身、何かを学ぶ際にはできる限り中立を保ち、自分の偏った見方や思い込みを意識するように努めているつもりであったが、それでもなお、自分自身の価値観やバイアスというフィルターを通して世界を見ているという事実気づかされた。

また、複数の参加青年が「一国の中にも存在する地域間格差」について言及してくれたことも、非常に示唆に富んでおり、深い学びとなった。

2) 題名：記憶の継承ワークショップ

主催者：J06, J17, J09, J11, J13, J08, J07

目標

私たちのセミナーの目的は、大切な記憶や文化的伝統をどのように保存し、次世代へ継承していくことができるかを探求することにある。このワークショップは、単なるクラフトのセッションではない。レジリエンス、復興、そして伝統の物語に触れるための、実践的な手段を提供するものだ。

参加者が後日、自作のキーホルダーや水引を見たときに、私たちが共有した物語を思い出し、その物語を自分たちの家族や友人にも伝えていきたいと感じてくれることを願う。

主催者の学び

主催者として、国境を越えて物語を共有することの持つ力について、より深い理解を得ることができた。

また、「楽しみながら学ぶ (Learning with joy)」ことの重要性にも気づいた。「文化遺産保存の危機」というテーマはともすれば重い話になりがちだが、ワークショップと組み合わせることで、参加者が楽しく、かつ主体的に知識を得られるようサポートすることができた。

この経験を通じて、自分たち自身でゼロからイベントを企画し、運営する実践的な能力も身についたと感じている。

3) 題名：伝統的な遊びから見る日本と世界の文化の発展～私たち自身の「文化」とは？～

主催者：J14, J04, J20

目標

- 参加者に日本文化を体験してもらう。
- 自国の文化の起源や、他国への文化の伝播について振り返り、多様な視点から考察することによって、参加者自身が「文化」に対する理解を再考する。

主催者の学び

- 東南アジアにおいて、文化とは必ずしも「自国のみに属するもの」ではなく、むしろ国境を越えて存在する「共有された文化 (shared sense of culture)」という感覚があることを学んだ。
- 参加者から、自国文化に対する強い誇りと同時に、他者の文化に対する深い敬意を感じ取れた。
- 適切なタイムマネジメントを行うためには、事前のリハーサルが不可欠であると実感した。

4) 題名：違法薬物の阻止：税関と世界平和

主催者：J02, J15, J16, J18

目標

- 麻薬（違法薬物）情勢に関する知識や情報を交換する。

- 税関業務に対する理解を深める。

主催者の学び

主催者としての経験を通じて、通関業務（税関手続き）のような極めて専門性の高いテーマを扱う際には、事前の準備がいかに重要であるか、その価値を学んだ。

<ラオス>

1) 題名：廃棄物を価値あるものへ (Waste to Worth)

主催者：L12, L04, L05, L08, L10, L15

目標

本セミナーの目的は、今日におけるファストファッションが環境に与える悪影響について議論し、共有することである。同時に、参加者の創造性を刺激し、廃棄物を地域社会にポジティブな影響をもたらすための「機会」として捉え直すよう促すことを目指した。さらに、参加青年たちが実際に素材を創造的再利用できるようになること、そして彼ら自身の視点や考えを積極的に共有するよう後押しすることも目的としていた。

主催者の学び

第一に、批判的思考や深い分析力といった、より高度な調査・研究能力を身につけることができた。

第二に、ワークショップの企画・運営方法や、チーム・マネジメントについて学んだ。

第三に、参加青年たちとの議論や意見の共有から、アップサイクルに関するさらなるひらめきを得ることができた。

2) 題名：思考の団結、結果としての勝利

主催者：L02, L14, L06, L03, L11, L01

目標

本セミナーの目的は、対話型かつ実践的な学びを通じて、参加者が効果的かつ自信を持って交渉する能力を高めることである。このアクティビティは、現実の事例を分析し、理論的な概念を実践に応用することによって、交渉に関する議論や多様な視点の交換を促すように設計された。

主催者の学び

主催者として、私たちはアクティビティの計画、調整、そして進行に関する非常に貴重な経験を得ることができた。参加者と関わる中で、コミュニケーション、チームワーク、そしてタイムマネジメントのスキルを向上させることができた。

またこの経験は、議論をリードし、グループワークを運営し、セミナー中に寄せられる様々な視点に柔軟に対応するための「自信」を育むことにも繋がった。

3) 題名:動き、繋がり、輝く (Move, Connect, Thrive)

主催者: L16, L01, L13, L07, L09

目標

本セミナーの目的は、私たちの文化を表現し、参加者にラオスの伝統舞踊、とりわけ「社交舞踊」の踊り方を指導するとともに、それが文化保存の枠を超えた意義深い恩恵をもたらすことを伝えることである。

それは、単に伝統遺産を次世代へと継承することだけにとどまらない。私たちのメンタルヘルス、社会的な人間関係、そして「帰属意識」に対しても、直接的で豊かな恩恵をもたらしてくれる。

主催者の学び

主催者として、私たちはアクティビティの計画、調整、そして進行に関する非常に貴重な経験を得ることができた。参加者と関わる中で、コミュニケーション、チームワーク、そしてタイムマネジメントのスキルを向上させることができた。

またこの経験は、グループ活動を運営し、社会的な繋がりを築いていくことへの「自信」を育むことにも繋がった。

<マレーシア>

1) 題名: もし隣で「それ」が起きたら? 立ち尽くさず行動するために

主催者: Ma04, Ma08, Ma10, Ma11, Ma15

目標

- 救急・防災意識の重要性を理解する。
- 日常で起こり得る緊急事態を認識する。
- 第一発見者としての青年の役割を認識する。
- 基本的な緊急対応の原則を学ぶ。
- 心肺蘇生法 (CPR) と AED の基礎を理解する。
- 基本的な救急箱の必須アイテムを確認する。

主催者の学び

- 人命を救う助けとなるシンプルで実践的なスキルを、ASEAN諸国の青年たちに伝えることができた。
- 緊急時の対応に必要な「救命技術」と、現在の青年たちが持っている知識・スキルとの間には、依然としてギャップがあることを学んだ。
- 助けの手を差し伸べられるようになることは、すべての人、とりわけ私たち「青年」が担うべき共通の責任であると実感した。

2) 題名: 心臓へのCPR (心肺蘇生) は知っていても、心へのCPRは?

主催者: Ma04, Ma08, Ma10, Ma11, Ma15

目標

- これらのテーマについてオープンに語ることで偏見を減らし、メンタルヘルスを私たちの日常生活における「当たり前の一部」として常態化する。

- 青年たちが、教育やキャリア構築のプレッシャー、そして21世紀特有の環境的ストレス要因にどう対処していくかは、大きく左右されると伝える。
- 青年たちが燃え尽き症候群に直面している際に役立つ、「自己調整」のスキルを構築する。
- 絵を描き、心の中にある思いを外へ吐き出すことによる「非言語的な自己表現」を促す。

主催者の学び

- ASEAN諸国の青年たちのメンタルヘルスを支援する、シンプルで実践的な手法(スキル)を届けることができた。
- 自身のメンタルヘルスをケアするための「多様な方法」が存在することを知っている青年もいれば、そうした方法があること自体を知らない青年もいるという現状を理解できた。
- 芸術を取り入れることは、人々の関心を惹きつけ、ストレスを軽減するための最も優れており、かつエキサイティングな方法であると学んだ。

<フィリピン>

1) 題名: スクリーンの向こう側: 超オンライン社会における若者のメンタルヘルス

主催者: P04, P02

目標

- テーマの導入: 「スマホやスクリーンの向こう側にある人生 (現実世界)」について考える機会を提供する。
- テクノロジーを拒絶するのではなく、それらとの「バランス」の重要性を強調する。
- ASEAN及び日本の青年たちが日常的に実践している、さまざまな「ストレス対処法」を集め、共有する。

主催者の学び

主催者として、船内で他の青年たちと私たちの啓発活動や提言を共有できたことに深く感謝している。私たちは、ASEANと日本の青年たちが皆よく似た「ストレス対処のスタイル」を持っていることを学んだ。

また、メンタルヘルスは私たちの各国において重要視されつつあるテーマではあるものの、依然としてさらなる啓発が必要とされている現状も理解した。

参加者たちは自身のストレス対処法について語る際、非常に主体的に取り組んでおり、彼らがこのセッションを心から楽しんでくれたことがはっきりと分かった。

2) 題名: プロジェクト・インクルセーブ (incluSAVE) とASEANにおける包摂的ガバナンス

主催者: P03

目標

本セミナーは、特に地域社会における取り組みに焦点を当てながら、障害者の社会的包摂に関するフィリピン現状を共有することを目的としている。具体的には、以下の目標を達成することを目指した。

- 当事者の体験談を通じて、フィリピンにおける障害のある青年の「生きた現実」を理解する。
- 障害者のインクルージョンを促進する、国及び地域レベルの制度や仕組みを認識する。
- ASEAN諸国の障害のある人々が直面している障壁を特定する。
- 障害者のインクルージョンに向けた「包摂への誓いや行動目標」を少なくとも1つ作成する。

主催者の学び

本セミナーを通じて、ASEAN諸国と日本において、障害のある人々が抱える課題はよく似ているということを学んだ。教育、雇用、そして社会基盤のアクセシビリティに関する課題が、どの国でも顕在化している。その一方で、社会参画、権利の承認、アクセシビリティなど、障害のある人々の社会への統合・主流化を可能にする法律も各地域に存在している。

「インクルージョン・コミットメント」を作成する中で、私が特に印象に残ったのは、「誰一人取り残さない (no one is left behind)」という言葉である。使い古された格言 (クリシェ) かもしれないが、とりわけ青年たちの相乗効果が発揮されたとき、この言葉は依然として極めて強力な力を持つと実感した。

3) 題名：バハイ・クボ：フィリピンの家々を巡る旅

主催者：P16, P09

目標

本セミナーの主な目的は、楽しく創造的なアクティビティを通じて、建築と文化に対する理解と尊重を深めることである。

もう一つの目的は、ASEANの青年たちの間にある「文化的な繋がり」を強化することである。このアクティビティを通じて、参加者たちはこの地域の多くの伝統家屋が似ていることを発見し、それが「連帯感」と「アイデンティティの共有」を築く一助となった。

また、参加者が互いに交流し、創造性を発揮し、学び合えるような、リラックスした楽しい学習空間を提供することも本セミナーの狙いである。

主催者の学び

私たち自身、伝統建築と文化に対するより深い敬意と理解を得ることができた。参加者たちが「バハイ・クボ (フィリピンの伝統的家屋)」を自分たちの母国の家と結びつけて考えている姿を見て、地域の遺産を保存・継承していくことの重要性を実感した。

最も重要なこととして、他の参加者たちとの強固な絆を経験できたことが挙げられる。このセッション

は、楽しくポジティブな環境の中で、友情、チームワーク、そして有意義な交流を生み出す機会となった。

全体として、このアクティビティは、文化理解、創造性、そして地域全体の結束を促進すると同時に、私たち自身がユース・リーダーとして成長する大きな助けとなった。

4) 題名：はじめの一步：文化を越えた自閉症支援ガイド

主催者：P05, P08

目標

- 自閉症を、文化や家族の背景によって形成される「連続体」として理解する。
- 自閉症支援における「初期対応者」としての、家族や地域社会の役割を認識する。
- 実践的で文化に配慮した資料である「はじめの一步」ガイドを活用する。
- 参加者自身が、自分の地域社会で家族を支援するために取ることができる、意味のある「はじめの一步」を一つ見つけ出す。

これらの目標に加えて、本セミナーは参加者間の協働を促し、自閉症に対する好奇心や対話を喚起し、彼らが国境を越えて協力し合えるようにすることも目的とした。

主催者の学び

主催者として得られた重要な気づきの一つは、参加者が自分自身のストーリーを共有するために、どれほど多くの時間と空間を必要とし、またそれを価値あるものと感じているかを認識できたことである。セッションの時間は限られていたにもかかわらず、参加者は議論や資料の読み込みに深く没頭していた。これは、学習教材が身近でアクセスしやすいものであれば、自然と内省や対話が促されるということを実証している。

またこの経験は、ファシリテーションにおける重要な教訓も補強してくれた。講義形式ではなく、「好奇心」を起点としてセッションにアプローチしたことで、学習プロセスがより効果的になった。参加者の経験を通じて「大人の学び」を引き出すアプローチは、とりわけ自閉症という繊細なテーマにおいて、より包摂的で有意義な議論を生み出した。

さらに、本セミナーを通じて、親主導及び地域密着型の支援システムに対する私たちの信念はより強固なものとなった。「ファースト・ステップ」のインパクトは、ツールそのものを開発することだけでなく、地域社会の中でそれをよりアクセスしやすく、使いやすいものにすることにあると明確になった。この経験から、ガイドラインを支援政策と結びつけたり、よりインクルーシブで自閉症に優しい、素晴らしいコミュニティの実現に向けて、親の会、学習センター、

地域組織が連携して取り組んだりするなど、プロジェクトをさらに発展させるための機会が浮き彫りになった。

今後に向けて、私たちは、このセミナーのモデルを他のグループにも共有し、「ファースト・ステップ」ガイドのより広範な活用を提唱するとともに、多様な文化的背景におけるベストプラクティスから学び続ける意欲を高めている。

<シンガポール>

題名：STEAM教育を世界へ：ロボット製作

主催者：S15, S02, S08

目標

- 主な目的は、参加青年にロボット製作のワークショップを楽しんでもらうとともに、自身が担当するディスカッショングループ(DG)のテーマを、いかにして子どもたちへ教えるか、既存の枠にとらわれず創造的に構想してもらう。
- この短いプログラムを通じて、こうしたワークショップの実施がいかに身近で容易なものであるかに気づいてもらい、この学びをそれぞれの母国へどのように持ち帰り、還元できるかを考えてもらう。

主催者の学び

私にとっての最大の収穫は、参加青年たちが童心に返って本セミナーを心から満喫してくれた際の「笑顔」を見られたことだ。そして彼らが、今度は「教える側」の立場に立ち、子どもたちに分かりやすい授業をどのように組み立てるかを真剣に考えてくれたことである。この経験は間違いなく忘れられないものであり、私自身も参加青年たちの熱意に触れ、心から楽しむことができた。

また、自身の進行という点においても、セミナーを通じて参加青年が抱きやすい疑問や不明瞭な箇所をよりの確に把握できるようになった。これは、今後のプレゼンテーションのスタイルや内容をさらにブラッシュアップしていくための大きな学びとなった。

<タイ>

1) 題名：心の拠り所(Home to My Heart)

主催者：T01, T02, T03, T04, T05, T06, T07, T08, T09, T10, T11, T12, T13, T14, T15, T16

目標

参加者が内省する時間を持てるよう導き、自分自身の強みを認識できるよう支援し、そして自分自身への感謝を促すことによって、精神的な健康を育む。

主催者の学び

- 自身の感情や情緒とどのように向き合い、コントロールするかという点について、参加青年たちが

持つ多様な視点を学んだ。

- セッションを通じて参加者同士が分かち合った温かい言葉や感謝の気持ちによって、私自身も力づけられたと感じた。
- 異なる背景を持つ人々とのコミュニケーションの方法や、彼らにとって安心できる「安全な場所」となるためのあり方について理解を深めた。
- プロフェッショナルとしてセッションを準備し、運営・進行するための具体的な手法を習得した。

2) 題名：危機の時、取り残された人々：障害と災害対応

主催者：T01, T02, T03, T04, T05, T06, T07, T08, T09, T10, T11, T12, T13, T14, T15, T16

目標

- 障害と災害についての認識を高める。
- 特に、災害時に障害のある方が直面する困難や、危機的状況下で彼らをサポートするための実践的な方法について啓発する。

主催者の学び

- 障害と災害に関する、参加青年たちの多様な視点を共有できた。
- 「もし自分自身が障害を持っていたらどう感じるか」という、当事者視点に立った感情や経験の共有がなされた。
- 参加者の中に、障害者の社会的包摂に向けた新たなモチベーションが芽生えたのを見られた。
- 本セミナーを実施・進行する上での、企画者及び運営者としての実践的な経験を積んだ。

3) 題名：タイ古式マッサージの物語

主催者：T01, T02, T03, T04, T05, T06, T07, T08, T09, T10, T11, T12, T13, T14, T15, T16

目標

本セミナーの目的は、アジア地域における文化融合の長い歴史を通じて発展してきた「タイ古式マッサージ」という地域の知恵を共有することである。さらに、タイ代表団として、参加青年たちに私たちの文化について学んでもらいながら、リラクゼーション・マッサージを提供する癒しの空間を創り出したいと考えた。

主催者の学び

タイの参加青年は、このピア・ラーニング・セミナーのために約3か月間準備を重ねてきたが、セミナー中には急な変更もあり、しなやかな回復力や対応力、適応力が求められた。これらは、私たちが一つの代表団として身につけることができた実践的なスキルである。

その一方で、タイの参加青年自身も「タイマッサージ」という価値ある実践的技術を獲得し、自国の文化

や先人の知恵についてより深く学ぶことができたのも大きな収穫であった。

<東ティモール>

題名：人種・民族・カースト・宗教・ジェンダー・経済・政治的（非）エンパワーメントのインターセクショナルリティ（交差性）

主催者：Tim03

目標

本セミナーの主な目的は、参加者に対して概念的な枠組みと実践的なアクティビティの両方を提供し、「交差性」というレンズを通して、アイデンティティの複雑さを理解し、認識し、そして言語化できるよう支援することである。

主催者の学び

企画者として、私たちはこの経験から非常に貴重な知見を得ることができた。ASEAN加盟国において、交差性がどのように異なって理解され、経験されているのか、そしてその意味が社会的、文化的、歴史的な文脈によっていかに変化し得るのかを学んだ。

この経験を通じて、私は交差性を多様な視点から捉え、個人の持つアイデンティティがどのように重なり合い、相互に影響を及ぼし合っているのかについて、より深く理解できるようになった。

<ベトナム>

1) 題名：賢く飲み、良く生きる：健康的な飲用の流儀

主催者：V07, V11, V13, V14, V05, V04, V06, V12

目標

本セミナーの目的は、お茶やコーヒーに関する「意識的な飲用習慣」への関心を高めることで、青年たちのより健康的な日常生活を促進することである。世界で最も一般的に消費されているこの2つの飲料は、若者の身体的な健康、精神状態、そして毎日のルーティンに強い影響を与えている。

参加者同士の経験の共有、実践的なヒント、そして異文化比較を通じて、いつ、どのように、そしてなぜお茶やコーヒーをバランスよく摂取すべきかを、参加者が深く理解できるよう支援することを目指した。ある特定の飲み物を推奨するのではなく、「節度」「自己認識」、そして「個々の違いの尊重」を強調し、参加者が日常生活において、十分な情報に基づいたより健康的な選択を行えるよう後押しした。

主催者の学び

本セミナーの企画・運営を通じて、事前の計画やリハーサル的重要性、そしてチームワークの大切さを深く理解することができた。セミナーをスムーズに運営し、確実に実行するためには、適切なりハーサルと練習を行うことが極めて重要であると学んだ。

また、異なる国々における似たような消費習慣や文化について、新たな知見や知識を得ることもできた。

2) 題名：レジリエンスの香り：持続可能な沈香と環境管理

主催者：V06, V03, V08

目標

- ・沈香の環境的及び文化的な重要性についての認識を高める。
- ・持続不可能な採取のリスクと、世界的な取引の圧力による危険性を浮き彫りにする。
- ・「ティエン・モック・フォン（Thiên Mộc Hương）」のケーススタディを通じて、持続可能なビジネスモデルを紹介する。
- ・経済発展を支援しつつ、伝統的な特産品をどのように保存・継承できるかについて、参加者に批判的・多角的に考えてもらうよう促す。
- ・持続可能性を実現するには、企業、政府、そして青年たちの協力が不可欠であるという考えを促進する。

主催者の学び

- ・より確かなファシリテーション・スキルと、人前で話すスキルを磨いた。
- ・対話型のディスカッションや、教育的なゲームを設計・構築する経験を積んだ。
- ・文化やビジネスに関連する「持続可能性」についての、より深い理解を得た。
- ・環境問題と、青年の社会参画や地球規模の責任とを結びつける能力を身につけた。
- ・経済成長と環境・文化保全のバランスを取るための「対話」を主導するという、実践的な経験をえた。

(5) ソリダリティ・グループ(SG)活動

SG活動は、PY相互の理解と友情を深めることを目的とした活動であり、主にSG対抗や全員参加形式のレクリエーションを行った。この活動の運営は、担当顧問であるNL2名（マレーシア、ベトナム）の指導の下、SG活動小委員会が行った。

SG活動小委員会は、SG内の団結力や連帯感を高めると同時に、活動を通してPYが心身ともにリフレッシュできるよう多彩な企画を立てた。こうしたSG活動を通して、SG内の結束だけでなくPY全体の一体感も高められた。

<SG活動の日程・内容>

SG活動I（1月31日）

① チームビルディング

- ・フラッグ制作
- ・チア練習

② SG対抗

- ・だるまさんが転んだ

- ・ ユニティ・イン・アクション (一致団結ゲーム)
- ・ 伝言ゲーム
- ・ ボトル渡しゲーム

SG活動II (2月2日)

- ・ クロスチームビルディング (全体)
- ・ チームビルディング (グループ)
- ・ ダンスバトル

(6) ナショナル・プレゼンテーション (NP)

ナショナル・プレゼンテーション (NP) は、PYが音楽・舞踊・劇・説明・ビデオ等を用いて、自国の文化・伝統・歴史・国民性・現在の青年を取り巻く環境等を紹介することにより、参加各国についての理解を深めること等を目的としている。

準備に当たっては、他の船内活動に支障をきたさないように配慮した。企画・準備から司会進行、パフォーマンス、音響・照明、ステージの飾りつけに至るまで、全てPYが役割を分担して行った。PYたちは、各国の文化の差異を再認識するとともに、日本と東南アジア文化圏の中での多様性や類似性について実感した。

また、各国NPが行われる日の昼食には、各国の食文化に対する理解を促進することを目的として、当該国の代表的な料理が二品提供された。

<日本>

【テーマ：つながり】

メインテーマは「つながり」である。このテーマを選定した理由は、多くの人と繋がることができるSSEAYPだからこそ、参加青年やナショナル・リーダー、管理部員の方々と一つの繋がりを大切にしたいと考えたためだ。構成は、日本の昔話「浦島太郎」と万博のパビリオンを掛け合わせたものである。主人公の浦島太郎が竜宮城に招かれ、「おもてなし」「食」「自然」「祭り」「平和」の各パビリオンを巡る。その過程で日本文化や東日本大震災からの復興の道のり、そして人と人との「つながり」の大切さを体感する物語となっている。パビリオンを訪れた後、浦島太郎は別れを惜しみながらも、竜宮城で築いた「つながり」を胸に新たな挑戦に臨むことを決意する。そして物語は、浦島太郎がSSEAYP2026へと向かっていく場面で締めくくられる。

<シンガポール>

【テーマ：ファーストラブ】

『First Love』は、1920年代から1940年代、そして現代に至るシンガポールの映像を織り交ぜたオリジナルの舞台演劇である。本作品は、シンガポールが東南アジアの近隣諸国と共有してきた文化的つながりを称え、表現したものである。

物語は、長年の時を経て再会した幼馴染の二人が中心

となる。彼らは過去を懐かしみ、互いの違いを乗り越えて、どのように未来が交錯していくかを語り合う。

劇中では、ヒップホップ、サムスイ・ウーマン (紅頭巾の労働女性)、マレー舞踊、インド舞踊などのパフォーマンスが披露された。楽曲には、シンガポール人アーティストや建国前のアーティストによる作品が採用された。フィナーレでは、lullaboyの『Someone Like U』とGentle Bonesの『Better with You』の生演奏に合わせ、コンテンポラリーダンスが披露された。

本公演の準備にあたって、シンガポール代表団は多忙なスケジュールの調整や、未経験のダンス、舞台演出の構成に尽力した。振付、脚本、映像、出演などの役割を分担し、シンガポールの文化を共有するとともに、「共に歩むことでより良くなる (better together)」というメッセージを伝えた。

<タイ>

【テーマ：昔々：サイアム・ゲームの始まり】

「昔々：サイアム・ゲームの始まり (Once Upon a Time: The Siam Game Begins)」は、外国人パフォーマーたちがタイの4つの地域 (北部、中部、南部、東北部) を旅する過程を通じ、観光をテーマに描いたパフォーマンスである。物語はゲーム仕立てとなっており、キャラクターは各地域で様々なミッションをクリアしなければならない。ミッションは地域の人々の暮らしを反映したもので、ソムタム (青パパイヤのサラダ) 作り対決、地域方言の習得、伝統文化や季節の祭りの体験などが含まれる。

各地域は独自のアイデンティティを提示した。北部は穏やかな伝統と遺産、中部は歴史とタイ社会の中心、南部は自然と沿岸部の暮らし、イサーン (東北部) は食・音楽・コミュニティを通じた温かさを表現した。パフォーマーはこれらの課題を通じ、単なる場所としてだけでなく、そこに住む人々とその生活様式について深く学んだ。

結びのシーンでは、すべてのASEAN諸国が「米」を共通の食として分かち合っており、それが結束、敬意、協力を象徴しているというメインメッセージが伝えられた。これは、文化や言語が異なっても、日々の伝統や「調和」の価値観を通じて繋がっていることを示している。

本発表に向け、脚本、舞台美術、音響、リハーサルなどの役割を分担した。メンバーの一部が遠方の県に居住していたため、オンラインでの練習や綿密な調整を重ねる必要があり、準備過程は困難を極めたが、その経験を通じてタイ代表団のチームワークと本事業への貢献意欲はより強固なものとなった。

<ブルネイ>

【テーマ：ダルサラームの宝石 (魅力) の探索】

ブルネイ・ダルサラームのナショナル・プレゼンテーションは、寸劇、伝統舞踊、武術、歌などの様々な舞台芸

術を通じて、同国の文化、歴史、遺産、アイデンティティ、そして生活様式の豊かさを紹介するものである。

パフォーマンスには、寸劇「バルナの物語 (The Story of Barunah)」、ジピン・ライラ・センバ(ダンス)、シラット(武術)、アライ・アシク(ダンス)、カンボン・アイール(水上集落)の寸劇、ダン・メンガライ(ダンス)、カイン・ジョン・サラット(ダンス)、ブンガ・シンプール(ダンス)、そして「アナック・ブルネイ(ブルネイの子どもたち)」が含まれる。

これらの演目に加え、「We are Brunei Darussalam(我々はブルネイ・ダルサラーム)」及び「Shared Prosperity in Diversity(多様性の中の共有された繁栄)」と題された詩の朗読が行われた。さらに、ブルネイ・ダルサラームの紹介、伝統的な遊び、カンボン・アイールの追憶、そしてブルネイSSEAYP同窓生やホストファミリーによる「にっぽん丸」への引退記念メッセージなど、複数の動画も上映された。

全体として、本発表は観客を楽しませると同時に、ブルネイ代表団(参加青年)がどこへ行こうとも、ブルネイ人としての強いアイデンティティ、精神、そして誇りを呼び起こすことを目的としたものである。

<カンボジア>

【テーマ:クメール・ラブコメディとクメール文化】

タイトル:ロムドゥルを探して(Finding Romdoul)

この物語は、主人公サンバスが運命の人を探す旅を通じて、カンボジアの村の風景や、地元のクメール・コミュニティの素朴さと温かさを描き出したものである。生涯の愛の象徴である「ロムドゥル」(カンボジアの黄色い花)を探す道のりで、サンバスは多くの困難を乗り越えていく。

繋がりを求める彼の旅は、「祝福の舞(Blessing Dance)」を踊る神聖な存在や、巨人「ヤック(Yeak)」の夢を見ることから始まる。その後、彼は伝統武術「ボカトル(Labokator)」を稽古する村人たちと交流する。旅の途中、彼はカンボジアの村の祭り「ボン・プム(Bon Phum)」に立ち寄り、そこでは村人たちが伝統的な織物の舞「ロバム・クロマー(Robam Krama)」を踊っている。しかし、黄金のロムドゥルを身につけた少女を探すサンバスはさらに歩を進め、「豊漁の舞(Robam Nesat)」の輪に加わる。物語はナレーションによって締めくくられ、最後にバッチ・ソング「さよなら、にっぽん丸」の合唱をもって全演目の幕を下ろした。

この物語の根底には、親が子どもを愛情深く育て、結婚などの人生の節目において導き、常にその幸せを見守り続けるという伝統的な家族の価値観が反映されている。同時に、喜びや絆を分かち合い、愛を育む「踊り」を通じて自らの文化を大切に継承する、カンボジアの人々の親しみやすさと強い共同体意識を称賛する内容となっている。

<インドネシア>

【テーマ:トヤ・プリマニン・ブワナ ~文明の礎としての水~】

インドネシアのナショナル・プレゼンテーションは、日常生活のあらゆる側面における主たる源である「水」の重要性に焦点を当てたものである。自然災害に頻繁に見舞われる国として、本発表は国民の生活を支える自然、特に水の役割を強調するとともに、生命の源である水が、人間によって守られなければいかに脅威となり得るかを描き出している。

本発表は、「オープニング(序章)」「コンフリクト(葛藤)」「レゾリューション(解決)」の3部で構成されている。

1) オープニング(序章)

物語は「キドゥン・トゥルン・ティルタ」の詠唱に始まり、バリ島の「ケチャ」、西カリマンタンの「パバット・ピブイ」の舞踊へと続く。これらは人間、自然、そして大地を守る精霊との調和を表現するものである。続いて、ジョグジャカルタの「ジャンピ」の舞踊が、伝統的なハーブ飲料売りの日常と、収入源としての水との密接な社会的繋がりを描き出す。ゴロンタロの「ビテヤ」の舞踊は農業の営みを反映し、人々と彼らを支える大地との結びつきを示す。最後に、北マルクの「ソヤソヤ」の舞踊により、この地域を世界的な注目の的とした「香辛料交易ルート」としての水の重要性が強調される。

2) コンフリクト(葛藤)

「葛藤」のパートでは、マレーの伝統的な詩歌「ランガム・ムラユ」を通して、人間の強欲が自然の恵みを災害と後悔の種に変えてしまうことへの警告が発せられる。これに続き、「イブ・ブルティウィ(母なる大地)」のモノローグと歌が、人間の怠慢と強欲によってつけられた傷に対する深い悲しみと苦痛を伝える。また、アチェの「リコク・プロ」の舞踊は、沿岸環境が人間活動による破壊に対して脆弱であることを想起させる。さらに、南西パプアの「フンベロ」の舞踊とリアウの「パチュ・ジャルール」は、地域社会の生活を支える野生生物を保護することの重要性を警告する。

3) レゾリューション(解決)

最後のパートである「解決」では、自然保護への希望が示される。ユラ・ユニタの楽曲「ムラキット」が歌われ、傷ついた後の癒やし、回復力、そして再建が語られる。これは、破壊されたものであっても、慈しみを持って接すれば少しずつ修復できるという希望と信念を反映したものである。

これら3つの主要パートの後、本発表はフラッシュモブで幕を閉じる。「タボラ・バレ」「ミナン・ティムール」「ニョン・ティムール」「ピカ・ピカ」といったダンスが披露され、自然を守ることができたときの「喜び」の姿が描き出される。

＜ラオス＞

【テーマ：文化の国】

本発表は、カムマン (Khammanh) という名の男性によるストーリーテリングから開始された。彼は第49回「東南アジア青年の船」事業 (SSEAYP) に参加するまでの自身の経験を語り、その物語を通じてラオスの多様な祭礼を披露した。

舞踊の演目には、「ブン・ピーマイ (ラオスの正月)」、「ラオスのケーンの音色 (世界遺産の音色)」、「ブン・オークパンサー (出安居)」、「プーム・チャイ・ナイ・バーン・コート (ラオス人としての誇り)」が組み込まれた。最後には、にっぽん丸の引退と本事業での素晴らしい思い出のために特別に書き下ろされたバッチ・ソング「The Reason Why」の合唱をもって、パフォーマンスを締めくくった。

本発表の目的は、「文化の国 (Land of Culture)」というテーマの下、祭礼というレンズを通して、多様な要素、民族衣装、伝統的な慣習を交えながらラオス文化におけるライフスタイルや信仰を提示することであった。

＜マレーシア＞

【テーマ：マレーシア・トゥルーリー・アジア ～真のアジア～】

はじめに、にっぽん丸船内で撮影された導入映像 (AIビデオ) とミュージックビデオが上映され、司会者による開会の挨拶が行われた。

続いて、ジョホール州発祥の舞踊「ザピン (Tarian Zapin)」、ミナンカバウ族の伝統に由来する皿の舞「ピリン (Tarian Piring)」、そして祝祭の場でハンドタンバリンを用いて踊る「サムラ (Tarian Samrah)」が披露された。さらに、マレーシアの旧正月を象徴する扇の舞「キパス (Tarian Kipas)」に続き、伝統打楽器「タブラ (Tabla)」の演奏と、棒を用いてリズムを刻む「インド舞踊 (Tarian India)」が披露された。

また、外柔内剛というマレーの戦士の哲学を表現した武術舞踊「シラット・タリ (Silat Tari)」、サイチョウの優雅な姿を描く「オラン・ウル (Tarian Orang Ulu)」、そして鷲の飛行を模した「スマザウ (Tarian Sumazau)」が続いた。

フィナーレでは、伝統的なディキル・バラットと現代性を融合させた「ディキル・フュージョン (Dikir Fusion)」と、マレーシアへの招待をテーマとした「ビジット・マレーシア2026」のダンスが披露された。最後は、会場の参加者全員をステージに招き、共に踊る「ジョゲット・ランバック (Joget Lambak)」で幕を閉じた。

＜フィリピン＞

【テーマ：MAHAL：フィリピン人の愛の物語】

「MAHAL：フィリピン人の愛の物語 (MAHAL: A Love Story of the Filipinos)」は、演劇とダンスを中心に構成された物語であり、「mahal」という言葉が持つ「愛」「価値」

「重要性」といった多義的な意味を通じて、フィリピン人のアイデンティティを描き出すものである。本発表は、フィリピンの人々の温かさ、伝統、回復力、そして深い国家意識を強調する、相互に関連した5つの幕で構成された。

冒頭の求愛や喜びの表現から、文化やコミュニティの活気に満ちた祝祭へと移行する場面では、同国の豊かな遺産と強固な共同体精神が反映された。続く内省的なセクションでは、移住や頭脳流出という現実に触れ、家族への愛ゆえにフィリピンの人々が払う犠牲に焦点を当てた。

物語は最終的に、希望、エンパワーメント、そして愛国心のメッセージとともに締めくくられた。これは、困難に直面してもフィリピンの人々は故郷と深く繋がり、帰還、奉仕、そして国づくりへの貢献を志向していることを示すものである。伝統・民族舞踊、フィリピン音楽、演劇的ストーリーテリング、そして象徴的な舞台演出を融合させた本発表は、愛・回復力・団結に根ざしたフィリピンの精神を、国際的な観客の心に響く形で表現した。

＜東ティモール＞

【テーマ：東ティモールの歴史と文化】

東ティモールのナショナル・プレゼンテーションは、国歌斉唱に始まり、続いてティモール島の歴史が紹介された。

物語は、浜辺を一人で歩いていた少年が、砂の上で弱りきった一匹のワニを見つける場面から始まる。少年は慈悲の心からワニを海へと押し戻し、ワニが再び自力で獲物を見つけ、生き延びられるよう助けた。この瞬間から、二人の間には強い友情が芽生えた。ワニは感謝の印として、少年を背に乗せ、海を越える旅へと連れ出した。

時が経ち、二人は別々の道を歩んだが、数年後に再会を果たした。成長し力強くなったワニとともに、彼らは再び海や島々を巡る旅を続け、道中で多くの朝日を共に見守った。やがて老いて力を失ったワニは、自らの体を島へと変えた。これが現在の東ティモールであると伝えられている。この伝説に基づき、東ティモールの人々は敬意を込めてワニをテトゥン語で「祖父」を意味する「アヴォ・ラファエク (Avo Lafaek)」と呼んでいる。

本発表では、こうした物語に加え、歴史、文化、経済、及び国の基本情報についての解説も行われた。

後半では、同国の豊かな歴史と文化的アイデンティティを反映した伝統舞踊と音楽が披露された。最後は、東ティモール代表団による日本の楽曲「心の友」の合唱で、本発表を締めくくった。

＜ベトナム＞

【テーマ：躍進するベトナム (The Ascending Viet Nam)】

ベトナムは現在、「ベトナム躍進の時代 (The Ascending Era of Viet Nam)」と呼ばれる新たな発展の時代を迎え

ようとしている。本発表は、ベトナムという国と国民が、次なるステップへ進む準備が整っていることを示すことを目的とした。プログラムは、「躍進の歴史」「躍進の文化」「躍進の国民」、そして「宇宙へ (Into the Cosmos)」の4つの主要パートで構成された。

各パートでは、異なる土地や背景から生まれる国の価値観を描きつつ、その根底にある「ベトナム人であること」への共通の誇りを表現した。文化的な豊かさを湛えた北部、毎年のように自然災害に見舞われながらも決して故郷を諦めない不屈の中部、そして寛大さと現代性に満ちた南部。それぞれの地域の特性が描き出された。

ステージでは、ダンス、歌、司会、多言語歌唱など、多彩なパフォーマンスが披露された。ベトナム代表団は、脚本、映像制作、ダンス指導、ロジスティクス、デザイン、音響、リハーサルといった役割を分担して準備にあたった。最後の演目では、各国の代表団から1名ずつを伝統衣装でステージに招いた。これは、ベトナムがすべての国際的な友人を歓迎し、自国の価値観を分かち合う姿勢を象徴するものである。

(7) 自主活動 (VA)

自主活動 (VA) は、PY個人または数名のグループにより、自らが行いたいと思う活動を自由に企画し、参加者を募り実行する活動である。これによりPYは自らの考えや思いを発信し、企画・実践する力を養うとともに、国やSG、DGの枠を超えて活発に交流することができた。

＜自主活動の例＞

- 水引ワークショップ
- コーヒー＆チョコレート (インドネシア・ベトナム・東ティモール)
- 映画鑑賞会
- カラオケナイト
- SSEAYPタレントショー
- 民族衣装コラボレーション (ブルネイ・マレーシア)
- かぎ針編みワークショップ
- スケッチ・セッション

- ヘナ、書道、バティック・ペインティング、ファッションショー
- ボードゲーム

(8) フリーデイ

船内及び訪問国で密度の濃い活動をこなす中、PYの体調管理のため、公式な活動を行わない半日フリーデイを2回設けた。また、フリーデイは、PYが自発的に自由に参加者同士の交流を深める機会でもあった。フリーデイとした日はモーニングコールやモーニング・エクササイズは行わず、モーニング・アセンブリーは通常よりも時間を遅らせ、12時から12時30分の間に行った。

(9) その他の活動

① 避難訓練 (1月26日)

ドルフィンホールでにつぼん丸乗組員から説明を受けた後、各自室に戻り、船内放送と非常ベルを合図に、各自救命胴衣を着用し、指定の避難場所に迅速に集合した。その後、担当の乗組員から緊急事態発生時の対応方法について説明を受けた。

② 管理官講話 (1月28日)

自身の生い立ちや日本政府職員としての経歴を紹介した上で、沖縄について、ASEAN各国との歴史的な関わりも含めて説明し、各国それぞれの国内における多様性についても理解を深めてほしいと激励した。

③ 船長講話 (1月28日)

につぼん丸の関谷雅船長が自身の生い立ちや船乗りになる夢を抱いたきっかけ、船の設備や航海に必要な専門知識について説明し、PYの船及び航海に対する認識を高めた。

④ 船内見学 (1月28日)

SGごとに、操舵室を見学し、備えられている機器やその操作方法等について乗組員から説明を受けた。

5 下船

2月13日、ホームステイ・マッチング及び船内公開終了後、PYは順次2階で荷物を回収し、それぞれのホストファミリーと共に下船した。

